

ラチャパット大学における日本語学習者の学習リソース活用

池島真弓・松尾憲暁・武蔵祐子

1. はじめに

日本語教育における学習者中心へという流れの中で、日本語教師は学習者の質や関心、特性などを考慮に入れるとともに学習者の立場にたった教室活動をいかに提供するかについて、これまで大きな関心が払われてきた。その一方、近年、学習者一人一人の学習過程に注目し、言語学習を教室内の活動に留まらない、より大きな枠から捉える動きも出てきている。このような学習者の多様な環境からの学習の捉えなおしの一環として、学習者の周りにどのような学習リソースが存在し、学習者がどのようにそれらを活用しているのかを教師が知ることは、教室活動が限られている海外の日本語教育の場においても非常に重要である。

そこで、我々「ラチャパットの日本語教育を考える会」（以下、ラチャ会）はラチャパット大学（以下、RU）の日本語学習者の周りにどのような学習リソースが存在しているのかを把握するために、学習リソースアンケート調査を実施した。

本稿ではその調査結果について報告を行い、そこから、今後、タイで教える日本語教師がどのような働きかけをしていけるかについて考える視点を提示していきたい。

2. 本稿における学習リソースの定義

学習リソースの定義としては「学習に関するインターアクションの対象となるもの」（田中・斉藤 1993, p. 44-45）、「授業、授業外に関わらず日本語学習に影響を与える人やモノ、場」（工藤 2006, p. 84）といったものがあるが、本稿では「学習に関する材料」という広義の意味として扱う。

また、学習リソースの分類として、田中・斉藤（1993）の「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」、トムソン（1997）の「情報サービス・リソース」という分類を参考にした。「人的リソース」は学習者が接触する人であり、本稿では日本人以外であっても日本語を使用する対象であるならば「人的リソース」として扱った。「物的リソース」は学習者が接触するモノであり、「教材」以外に CD、テレビ、雑誌などが挙げられる。「社会的リソース」とは学習者が生活しているコミュニティーやネットワークのことである（田中・斉藤 1993）。本稿では日本人との交流の機会等も社会的リソースに含め、「日本・日本語との接触機会」として扱った。「情報サービス・リソース」は海外における日本関連の情報源としてのリソースであり（トムソン 1997）、本稿では日本の情報を入手する際に用いる媒体を使用言語を問わずに「日本に関する情報の入手手段」としてこれに含めた。

3. ラチャパット大学におけるアンケート調査実施概要

3.1 調査の目的

本調査では以下の3項目を把握することを目的とした。

- 1) RUで日本語を学ぶ学習者が、授業以外でどのような勉強をしているか。
- 2) 学習者の周りには、どのような学習リソースがあるのか。
- 3) 学習者がどのような学習リソースを活用しているのか。

3.2 調査対象

日本語教育を実施しているRUにおける日本語学習者を対象とした⁽¹⁾。そのうち、回答を得られたのは19校⁽²⁾、全回答者数は1,119名であった。

3.3 調査期間

2006年11月1日～30日

3.4 調査方法

ラチャ会が把握している情報を基に、タイ国ラチャパット大学43校を対象として調査票を配布した。

調査票の配布及び回収については、調査者が郵送したタイ語による調査票原本を調査協力者が各校の状況に合わせて複製し、回収、返送するという方法で行った。また、日本人調査協力者のことを考え、調査票原本の日本語訳も合わせて送付した。

3.5 調査票

主な調査項目は以下のとおりである。質問票については2001年に実施された国立国語研究所の調査(2003)を参考にした。

F:属性

Q4: 日本に関する情報の入手手段

Q1: 現在学習のために利用しているリソース

[情報サービス・リソース]

Q2: 授業外で接触する人的リソース

Q5: 日本・日本語との接触機会 [社会的リソース]

Q3: 授業外で接触する物的リソース

Q6: 学習者が充実を期待する学習リソース

4. アンケート調査結果

4.1 アンケート回答者の属性

まず、本調査に回答した学習者の性別、母語、専攻、日本語能力検定試験の所持、授業外での学習時間数、日本への渡航経験等の基礎的情報について聞いた結果を報告する。

4.1.1 性別

回答者の性別は、女性が82%、男性が16%、無回答が2%となっており、女性が大多数を占めている。

4.1.2 母語

回答者の母語は99%がタイ語である。タイ語以外では、ラオス語、クメール語、英語などが挙げられていた。

4.1.3 専攻

回答者を専攻別に見ると、主専攻が39%、副専攻が27%、選択科目履修者が33%となっており、比較的、均等に回答を得られた。

4.1.4 日本語能力試験の所持

回答者のうち、日本語能力試験の級を所持している者は185名(16%)、所持していない、受験したことが無い者は846名(75%)である。所持していると答えた回答者のうち、4級が63%、3級が23%で、4級・3級所持者が全体の9割近くを占めている。

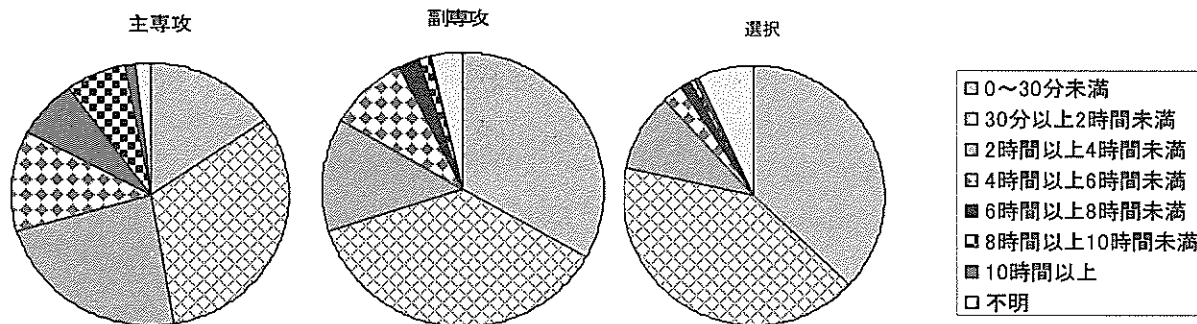
4.1.5 大学以外の機関での日本語学習に関して

大学以外の機関(語学学校等)で日本語を学習している回答者は71名(6.3%)であった。

4.1.6 授業外での日本語学習時間

授業外で1週間にどのくらい日本語を勉強しているかについて尋ねたものである。

グラフ1 授業外での学習時間数(専攻別)



副専攻、選択科目履修者は、授業外での学習時間数が2時間未満との回答が7割以上を占めている。一方、主専攻は2時間以上が約半数、6時間以上も10%以上いた。

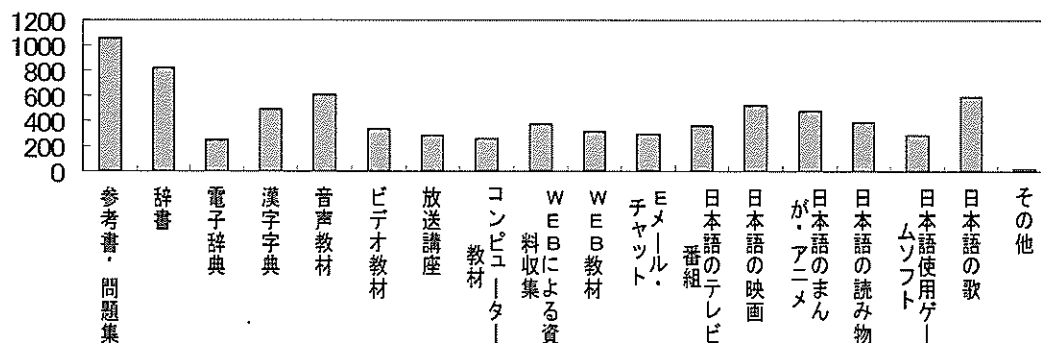
4.1.7 日本への渡航経験

渡航経験があると答えた回答者は33名(3%)にとどまった。1回の渡航期間は平均2週間程度で、観光を兼ねた語学研修・交流会を主な目的としていた。

4.2 現在学習のために利用しているリソース

現在利用中の学習リソースについて、複数回答で聞いたところ、次頁のような回答が得られた。

グラフ2 現在利用中の学習リソース（複数回答）



一番多いのは「参考書・問題集」、続いて「辞書」となっている。

4.3 授業外で接触する物的リソース

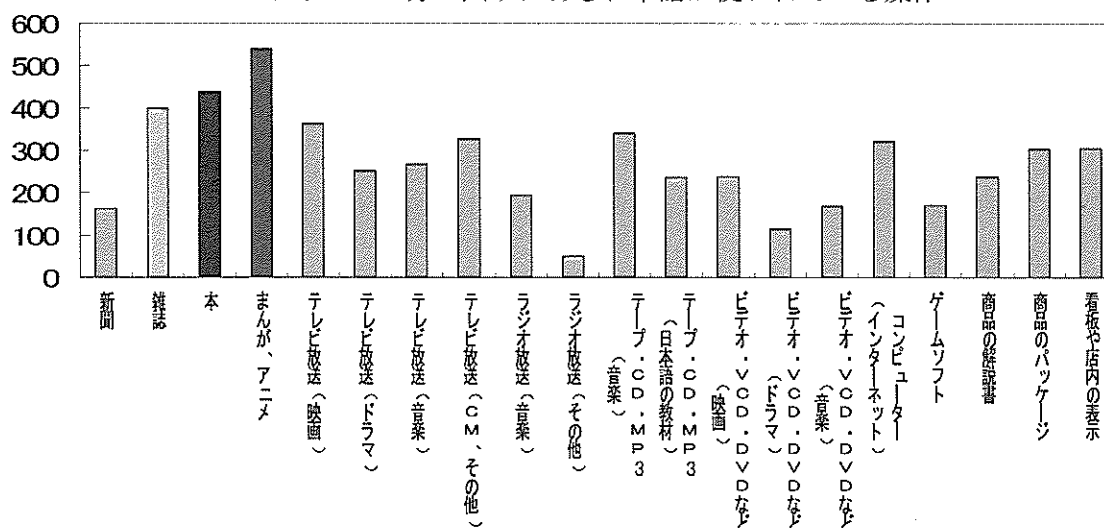
本項目では、授業外で、かつ教師から与えられたものではない日本語が使用されているモノとの接触について調査した。まず、身の回りにある物的リソースは何か、そして、その中で自分から積極的に利用しているものは何かについて聞いた。4.2 が学習目的で利用しているリソースについて尋ねたものであるのに対し、本項目では、目的が学習であるかは問わず、接触しているリソースについて調べた。

4.3.1 授業外で接触する物的リソースの有無

「ある」が 827 名、「ない」が 244 名で、「ある」が 4 分の 3 を占めている。ここで言う接触とは、積極的に使用するものだけではなく、自分の意思とは関係なく目にするもの耳にするものも含まれている。

4.3.2 身の回りにある物的リソース

グラフ3 身の回りにある日本語が使われている媒体

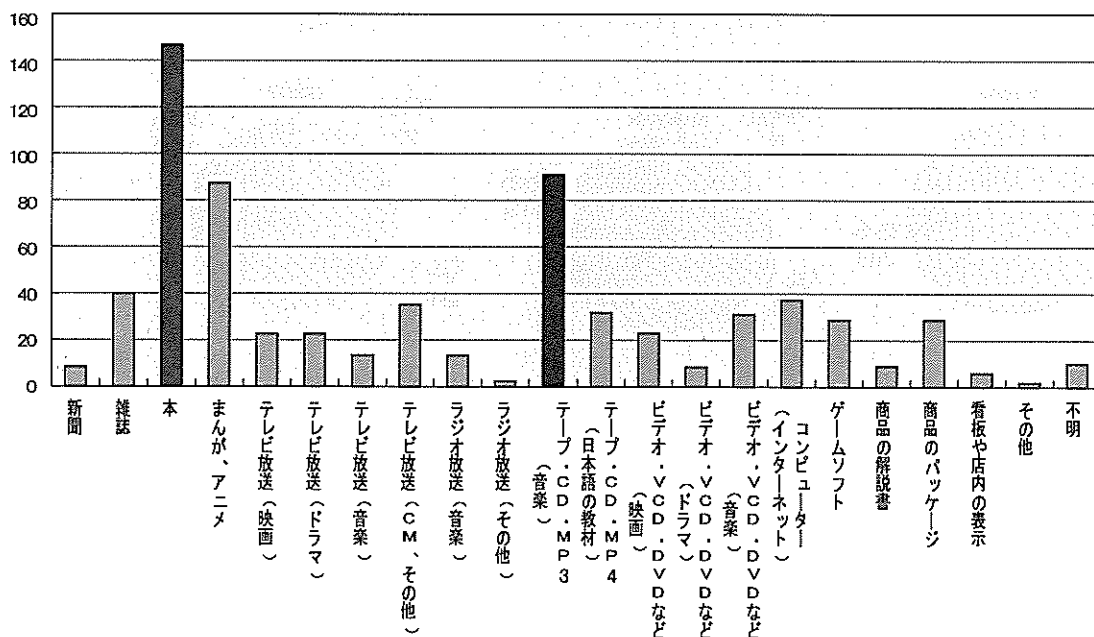


前項のグラフの通り、「まんが・アニメ」、「本」、「雑誌」の順となった。「商品のパッケージ」、「看板や店内の表示」で、日本語を目にしている回答者も多い。

4.3.3 積極的に利用している物的リソース

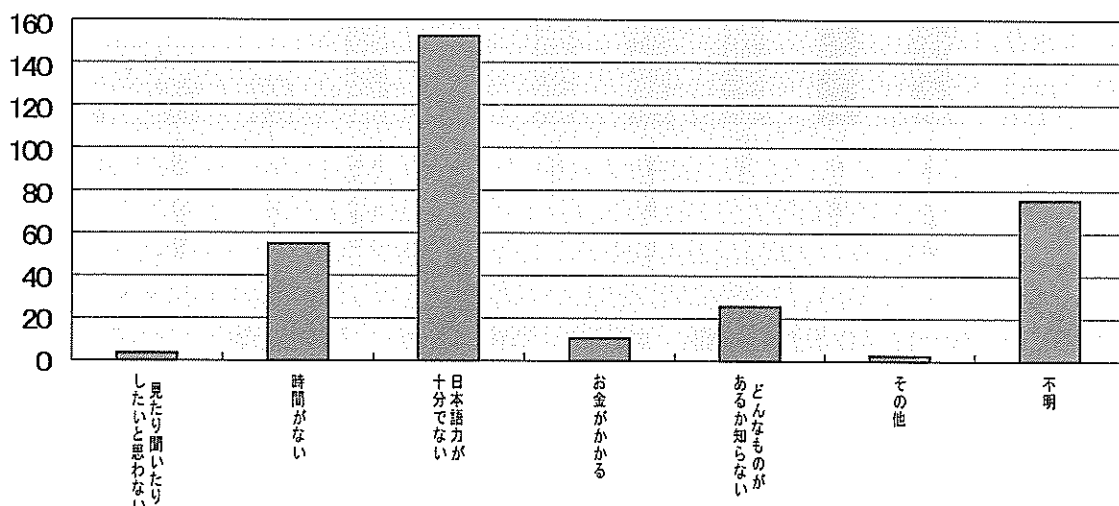
4.3.2 では、身の回りにある物的リソース全般について触れたが、本項目では、その中で積極的に利用しているものを回答してもらった。結果は以下の通りである。

グラフ4 最も積極的に利用している媒体



4.3.4 授業外で接触する物的リソースが無い理由 (複数回答)

グラフ5 接触が無い理由



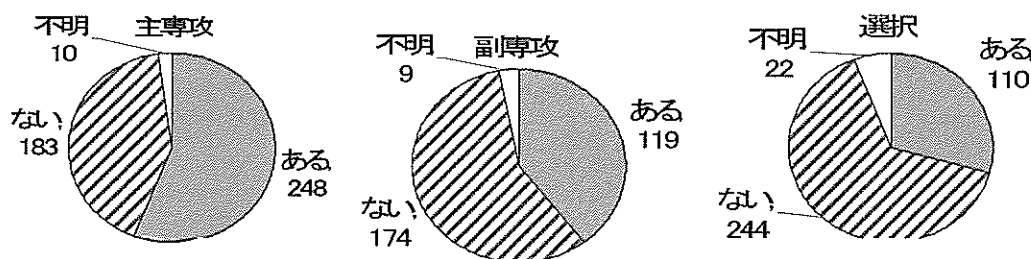
「日本語力が十分でない」が突出している。その他として、「見るものがない」「まず英語を到達させたい」などが挙げられた。

4.4 授業外で接触する人的リソース

4.3では、授業外で接触する物的リソースについて聞いたが、本項目では、モノではなく人との接触について調査した。

4.4.1 授業外で接触する人的リソースの有無（専攻別）

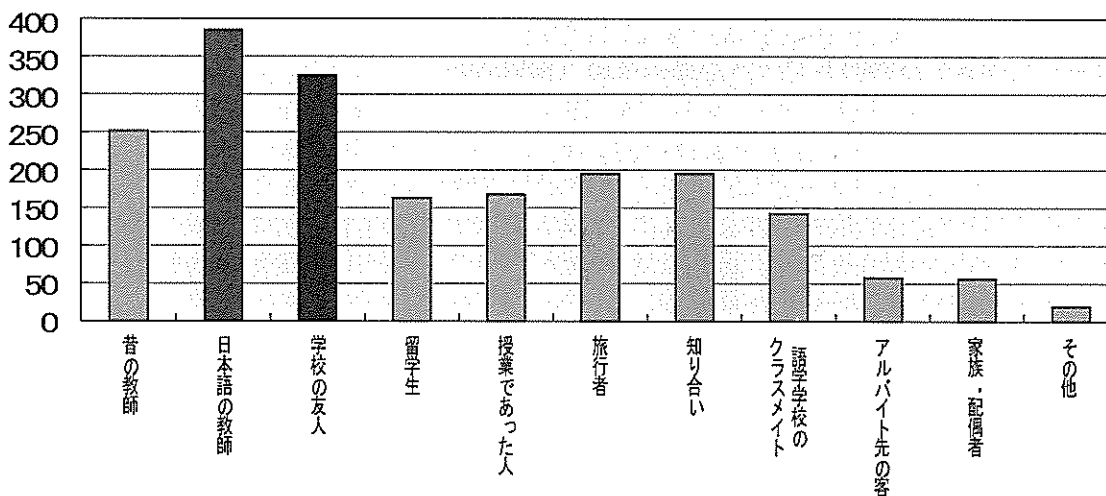
グラフ6 授業外で接触する人的リソース（専攻別）



主専攻は半数以上が「ある」と回答し、副専攻は約40%、選択科目履修者は30%が「ある」と回答した。

4.4.2 接触相手の内訳とその詳細

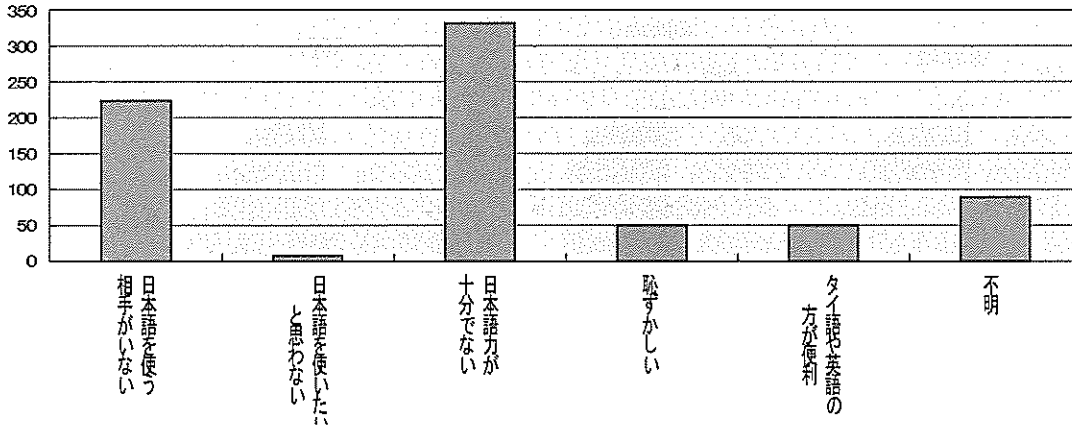
グラフ7 接触相手の内訳



一番多かったのは、「日本語の教師」。続いて「学校の友人」、「昔の教師」となった。教師は日本人が多く、学校の友人はタイ人がほとんどであった。頻度については、現在の教師とは週に2~3回、昔の教師とは月に2~3回、友人とは毎日という回答が多かった。使用言語については、日本語とその他の言語（タイ語）を併用している。接触手段は、現在の教師や学校の友人とは、ほとんどが直接の会話、次いで電話である。昔の教師については、会話、次いでEメールが多い。

4.4.3 授業外で接触する人的リソースが無い理由

グラフ 8 授業外で接触する人的リソースが無い理由



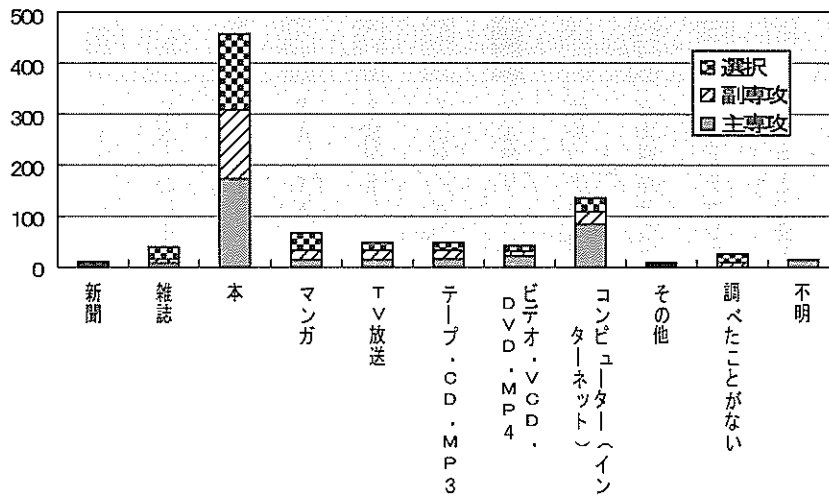
「日本語力が十分でない」「日本語を使う相手がない」が多かった。

4.5 日本に関する情報の入手手段〔情報サービス・リソース〕

本項目では、日本に関する情報を入手する際に、最もよく利用する媒体について調査した。内容が日本についてのものであれば、日本語の使用の有無は問わなかった。

4.5.1 日本に関する情報の入手手段

グラフ 9 日本に関する情報を入手する際、最もよく利用する媒体



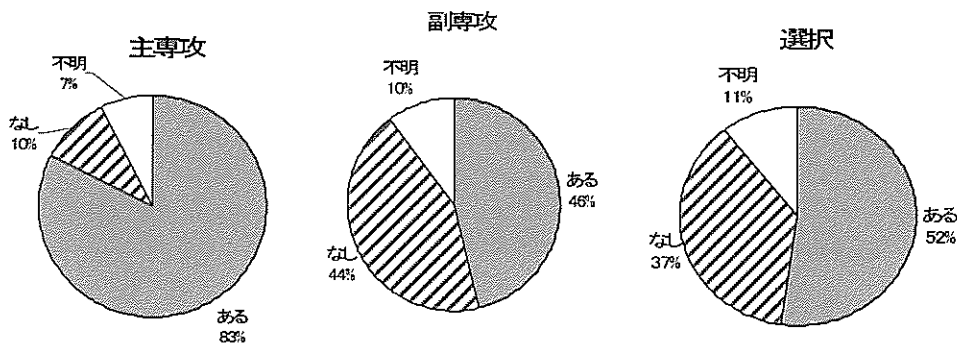
最も多いのは「本」。次いで「コンピューター」、「マンガ」である。使用言語は、本に関しては日本語、コンピューターやマンガはタイ語の割合が高い。

4.6 日本・日本語との接触機会（経験）〔社会的リソース〕

主に学校行事などで日本語を話す機会があったかや、日本語を使う場所に行く機会があったかどうかなどを今までの経験として聞いた。

4.6.1 日本・日本語との接触機会の有無

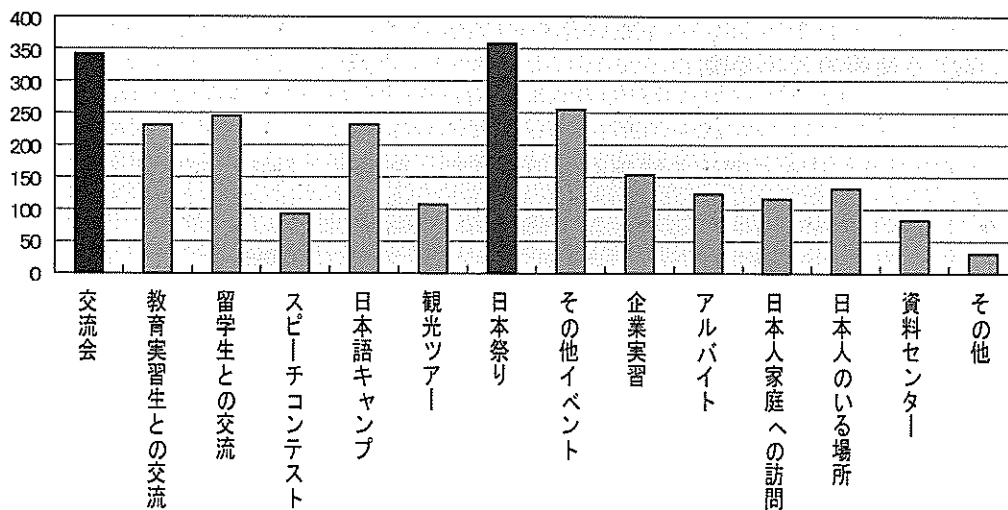
グラフ 10 日本・日本語との接触機会の有無（専攻別）



「ある」は主専攻で圧倒的な数を占めているが、副専攻、選択では半数しかない。

4.6.2 日本・日本語との接触機会の内容

グラフ 11 日本・日本語との接触機会 内訳

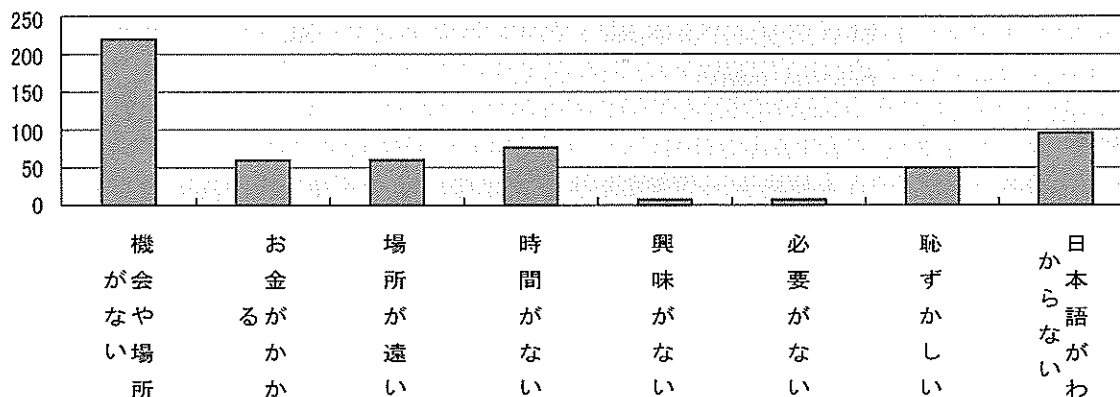


一番多かったのは「日本祭り」、次が「交流会」、次いで「教育実習生との交流」や「留学生との交流」など日本人学生との交流も上位に挙げられた。

4.6.3 経験したことが無い理由

日本・日本語との接触機会を経験したことが無い理由については、次頁のような回答が得られた。

グラフ 12 経験したことが無い理由



「機会や場所がない」ということを理由に挙げている回答者が大多数を占めている。人的、物的リソースとの接触がない理由では、「日本語力が十分でない」という答えが多かったのに対し、こちらは機会そのものがない、という回答者が多かった。

5. まとめと今後の課題

本調査により、RUの学習者が日頃、どのような学習リソースをどのように活用しているかについての全体像を認識することができた。しかし、学習リソースがどのような学習環境を作り出し、それがどのような影響を与えているかを知るためには、個人もしくはグループにフォーカスを当て、インタビュー調査を行う必要がある。

学習者の多様化に対応していくことは教師にとって大きな課題であるが、その中で学習者一人一人の学習環境をしっかりと見ていくことも必要となる。春原が言うように、「人は、語学能力→コミュニケーション能力→インターアクション能力の順に社会的関係性を構築していくのではない(春原 1999, p. 186)。」現実的には実際の場面におけるコミュニケーションの必要性が言語能力の獲得につながっていく。そのことを考慮に入れ、私たちは「教室内」と「教室外」が結びつくようにコースをデザインしていく必要があるだろう。

注

- (1) RUでは日本語科目の突発的な開講・閉講が多く、ラチャ会ではRUにおける日本語科目を開講している学校数、学習者数などの情報を正確に把握しきれていない。本調査では、過去に日本語科目を開講していた学校、及び2006年10月時点でラチャ会が日本語科目開講を確認していた大学に調査票を郵送した。そのため、本稿では回収率については明記しない。RUにおける日本語の開講状況及び学習者数の把握は今後の課題となる。
- (2) 調査に協力していただいた19の大学は以下のとおりである。アユタヤRU・ウッタラディットRU・ウドンタニーRU・カンチャナブリーRU・サコンナコンRU・スアンスナンタRU・スアンドウシットRU・チェンマイRU・チェンライRU・ラチャナカリンRU・テープサ

トリ RU・バンソムデットチャオプラーRU・プリラム RU・ピブンソクラム RU・ナコンシータマラート RU・ナコンパトム RU・ナコンラチャシマーRU・マハッサラカム RU・ワライヤロンコン RU (50 音順)

参考文献

- 国立国語研究所 (2006) 『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究海外調査報告書』
- 田中望・斉藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発』、大修館書店
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子 (2006) 「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性』、67-102、アルク
- 春原憲一郎 (1999) 「第 13 章 学習ストラテジーとネットワーキング」宮崎里司・J.V. ネウストプニー編『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—』、くろしお出版、183-195
- 本名信行・櫛田佳子・竹下裕子 (2000) 「第 5 章 タイの日本語教育：現状と課題」本名信行・岡本佐智子編『アジアにおける日本語教育』、99-127、三修社
- トムソン木下千尋・舛見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者—その問題点と教師の役割—」『世界の日本語教育』第 9 号、15-28
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第 7 号、17-29

謝辞

調査にあたり、調査票の作成及び調査方法などに関して貴重なご助言いただいたタイ商工会議所大学の佐藤純氏、ニューサウスウェールズ大学のトムソン木下千尋氏、京都教育大学の浜田麻里氏、翻訳を快諾いただいた日高幸子氏、チュラロンコン大学の片桐カノックワン・ラオハブラナキット氏、テープサトリ RU のスニサー・タンマウィワット氏、アユタヤ RU のスパラーク・ゲオシンガム氏、カンチャナブリーRU のパッタラスパー・シエンヤイ氏、今回の調査に関して様々な面でご協力いただいた国立国語研究所の金田智子氏、アサンブション大学のタナサーンセーニー美香氏、国際交流基金バンコク日本文化センターの八田直美氏、また調査に協力いただいた RU の先生方、学生の皆さんには深く感謝の意を表したい。そして、調査班として調査開始から全面的に関わっていた元カンチャナブリーRU の長田善行氏には心よりお礼申し上げる次第である。

なお、上記の方々には数々の助言や協力をいただいたが、本稿の内容に関する一切の責任は執筆にあることを一言申し添えておく。

追記

本稿は「ラチャパットの日本語教育を考える会 第 11 回セミナー『発掘しよう！学習リソース』(2007 年 1 月 13 日)でのリソースアンケート調査報告に加筆修正を加えたものである。